私の定位置

草草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私の定位置

【Ｎコード】
Ｎ１０７６Ｙ

【作者名】
草草

【あらすじ】
私には定位置がある。そこに彼が現れた。それだけの、お話。

1

私はいつも同じ電車、同じ場所に乗る。

その電車はみんなが学校に来るより早い電車で、場所を選べば比較的空いている。入学当初に遅延している満員電車の洗礼にあって、今の時間にした。

乗る場所もポイントだ。後ろから三両目の後ろよりの端。これも学習したことなんだけど、ドア付近は満員のときひどい目に会う。だけど通路、つまり席の前に立てば一気に楽になるのだ。

そんな感じでその場所は私の定位置。家を出るのが遅れても、走って乗るほどだ。私はこだわりがあるほうなのか、そこに乗らないと一日中引きずる。もう生活のリズムに組み込まれているみたい。

さて。毎日乗っていると、同じ人を見かけることはままあるだろう。私にもそんな人がいる。

私がそこに乗り始めたのは、一年生の夏からだ。その頃はまだ同じ人を見ることはなかった。ううん、同じ人がいたのかもしれない。だけど周りの人はみんな同じような背広姿のサラリーマンだったから、わからなかったのかもね。自慢じゃないが、顔の覚えは悪いほうだ。

初めて見たのは秋だったと思う。いつもの定位置に乗ったら、私の目の前の席に男子高生が座っていた。うん、なんか新鮮だった。珍しいな、って思った。

その日から彼は毎日そこに座っていた。男子高生っていうのが私

にとっては強烈で、だから毎日座ってることが分かった。

そういう人に出会ったのが初めてだから、私、結構嬉しかった。心の中でおはようって言ってみたり。たまに彼がいなかったときは、どうしたんだろうって思ってみたり。

なんだかストーカーみたいだと自分でも思ったけど、他意はないから許して欲しい。ようは偶然の産物なのだ。どちらかの気が変わればすぐに終わる。お互いに何も気を配っていないのだし、ほんと、一方的に友達というか、同士だと私は思ってる。

それが彼に対する私の見解だった。

1（後書き）

初めての投稿になります。よろしくお願いします。

2

今日も無事に乗ることができて、一安心、というか満足な私。
実は2年生に進級できて、ぽかぽか陽気なこの頃。相も変わらず目の前には彼がいる。うん、おはよう。

ところで。電車に乗ってるとき、人間観察してるよ〜なんて猛者が世の中にはいるらしい。だけど私には無理だ。じろじろ見て、目があったらどうすりゃいいのか。
…ふん、どうせ小心者ですよ。どうせならシャイと言ってくれ。その方が惨め感少ないから。

でも最近は彼を観察することが増えた。いやだって、彼は始終本読んでいるんだ。たぶん私が毎日自分の前にいるなんて、認識もしていないだろう。…少し寂しいと思うけどね。

さてと、今こそ観察の成果を見せてやりましょうか。

彼はいつも三人席の端に座ってる。私が乗ってきたときには座ってるし、私が降りるまで座ってる。いつも座ってるから、利用駅は始発駅なのかも。…通学何時間なんだろう。確かに始発駅から立ちっぱなしは辛い。同情を禁じ得ないな。

年齢は高校生。制服から学校を割り出すなんて高度な技、私に追求されても困る。だから学校はどこか分からない。でも東京なのは確実。私が降りる駅の次って東京になるからね。大きな駅で乗り換えて、戻るような形になることもありえる。だけど、彼のイメージは東京の私立って感じだ。

髪の毛は黒い。これで眼鏡をかけてたなら、インテリ君ってあだ名は確実。優等生臭がむんむんしてくる。私が見るときは絶対本読んでるから、余計にそういう印象しかない。委員長って呼びたくなるよ。

立ってるところを見たことないから、身長は分からない。残念ながら、見たことあっても目測で数字まで出せない。自分の身長が如何せん小さいから、１６０越える人はみんな高いと思ってる。だから彼も高いに分類されると思う。

体格はよくないね。華奢に見える。手首とか細い。ちゃんと三食食べてるのか心配になる。きっと食べてるだろうけど。

あとは…。顔？ここ女子高生としては詳細に観察すべき点だよね。はは。

う～ん。

芸能人とかを見れば”かっこいい”、”かわいい”等を認識できるんだけど、身近にいる人ってどうなのか私にはわからない。だからそういうことは、簡単に口に出さないことにしている。

それと、今の生活は周り一色女の子なんだよね。女子校なんだ、私。男の子の比較対象さっぱりいないから、余計に判断の仕様がない。

まあ、つまり。芸能人並みではないってことだ。むむ、もしやこの認識の仕方って失礼に値するのか？……本人に言ってるわけでもないし、いいか。

……。

成果のはずなんだけど、何かいまいちだ。一年かかってこれってどうなんだろう。

うん、わかった。

私、探偵にはなれないな。

3

ラッキーなことに座れました。

常に、”彼がいつも私の前に座ってる＝私は座れない”って公式が成り立つ。彼の隣が空いたとしても、私の隣に立っている人が座るからね。だから通学して一年経っても、登校中は座れた試しがない。

だけど今日は座れた。沢山人が降りる駅で、座ってた人も立ってた人も降りちゃって。きたよ私の独壇場！譲るような人もいないしで、座らせていただきました。うんうんラッキー。まあ、あとたったの3駅だけど。

そしてはたと気が付いた。

私の右隣には彼が座っているのでは？

疑問形にするまでもない。右隣に彼が座ってるに決まってる。だってさっきまで私が彼の目の前に立ってた。

……。

ふおおぉぉ。初めてだよ！初めて隣に座っちゃったよ！うわ、うわ。隣見たいけど直視したら変だよね。思わず横を向きそうになった顔を、正面で固定させる。

隣に座ってわかったんだ。華奢とか言っちゃったけど、しっかりしてる。やっぱり男の子なんだよね。何となく、寂しい。

ええと。
そもそもなして私はこんなに動揺してるんだっけ。よしよし、少し落ち着いて考えよう。
……ダメだ。何か隣が気になる。あぁぁ。手持ちぶさたー。電車で座るときって何していればいいんだっけ？本でも持ってくればよかったかな。
うむ。目、瞑ろう。
寝たふりしよう。瞑想しよう。今こそ煩悩を消し去ろう！
そう思って目を瞑った。
ところでさ。人間目を瞑ってすることは一つだよね。
すなわち……
……ぐう。
「――――いいの？」
何か声が聞こえる。聞いたことない声だ。それに、最近めっきり聞かなくなった独特な声。

「降りなくていいの？」

……ん？

ぱちっと目を開ける。え。開けたってことは瞑ってたわけで。軽く記憶を探ると、確かに目を瞑った覚えがある。

声のした方向――つまり右隣をぼんやりと見たら、彼が私を見ていたわけで。そして目が合い。

一瞬フリーズした。

パニックを通り越して、むしろ緩慢に前を向く。視界に入ってきたのは向かいの窓越しの、見慣れた風景。そしてオマケとばかりにドアが開いてる。

……。

私が降りる駅やないかー！！

ガバッと鞄をつかんで猛ダッシュ。ええい、人の目など気にしておられるか。ドアがすでに開いてるってことはいつ閉まるか未知数だ。嫌だよ！ここで降りれなかったら惨めだよ！惨めな私を置いてかないで！

私が降りると同時に、ドアはお閉まりなさった。今日もいい仕事したぜ、とばかりに走り去る電車さま。

ホームで立ち尽くす私。脳内には彼のどこか心配そうな顔がリフレイン。

なんだろう。今、もーれつに。

恥ずかしい……。

私の人生の黒歴史にまた恥ずかしい出来事が追加されてしまった。穴があったら入りたい。そして誰か埋めて。

ちなみにさっきの経過をまとめてみるとこんな感じだ。

隣に座る→寝る→起こされる→逃げる

恥ずかしすぎる。なぜ寝たし私。瞑想どこいった！煩悩を消し去るというより、欲に負けてるじゃん！

ああぁ。よりにもよって彼に起こされたあ～。しかもお礼言ってない～。会わす顔ないよ～。

電車変えようかな…。でもそうしたら彼に会えない…。会ったら会ったで恥ずかしい。明日からどうしよう…。むしろ駅に行くのもいやだ…。不登校…。

うだうだうだうだしてたら、冷静な友人その1曰く、

「君のことなんて誰も見てないよ」

天然系友人その2曰く、

「そうだよ。きっとジャガイモ程度しか思われてないから大丈夫だよ」

それはフォローになっているのか？何か傷つくから止めて。

……まあ冷静に考えればそうだよね。私のことなんて、ネタの一つとして一回くらい語られて忘れ去られるよね。うんうん。

決めました。

何事もなかったように過ごそう。

……でも、とりあえずお礼言うか。

4

お礼を言いました。

……心の中で。

いやいやタイミングなかった！無理だってあの雰囲気！電車内静かじゃん！言いたくなかったけど、私へタレなんだよ！ごめんなさい！

次の日も彼はいた。私がぐだぐだしてたら駅についた。終わり。完。

もうさ。次の日が肝心だよね。その日を逃したら、言うタイミングなんて皆無に決まってるよね。今更？ってなるよね。

……私のばか野郎。

ここまできたら意地だ。ずっとこの電車に乗ってやる！！

と、決心してから早3ヶ月が経過。

すっかり季節は春から夏へ。ぽかぽかからじめじめへ。そんな天気を反映したように、今日の私はブルーなり。

なんかダルい気がする。

朝に少し違和感を感じたけど、気のせいで済ませた。でも電車に乗ってから本格的に何かヤバい。空気が悪いのだろうか。閉鎖的な空間だもんね。

悶々と考えていたら、次の停車駅を過ぎていた。それにも気付か

ないなんて、割と重症なのかもしれない。軽く考えていた認識を引き締める。
そして次の駅で降りてしまおうと決心。でも、そのうち立ってるのがやっとの状態に。……わお。
頭はフル回転でこの事態に対処しようとしたけど、もう思考力もなくなっているらしい。浮かぶのは「気持ち悪い」の一つだけ。はは、どうしようか。

そこに舞い降りた、「大丈夫？」という声。

うわあ、はた目から見てもヤバい状態なんだなあ、なんて思いながら機能停止していた視覚を働かせると、彼が立っていた。というか、見下ろされてた。
あれえ？何て考えているうちに、「座って」と空いている席に座らされる。何で席が空いてるんだ？……あぁ、彼が席を譲ってくれたのか。
ありがとうとかごめんなさいとか、言うべきことは沢山あるのに声が出てこない。壁にもたれ掛かって、彼を見上げるので精一杯。

「次の駅で降りよう。それまで寝てていいから」と、彼は安心させるように微笑んで言った。

なるほど、彼はいい人なのか。
そうだよね。この前も起こしてくれたし、あぁ、何ていい人なんだろう。

普段”かっこいい”だの”かわいい”だの思わない私だけど、綺麗な笑顔だと思った。言っておくが、本当にこんなこと思うのは特殊だから。うんうん、すごいことなんだ。

だから。私はその笑顔に免じて、素直に目を瞑った。

結局私が起きたのは終点の駅だった。しかも救護室。彼もそこにいた。
曰く、私がよく眠っており、辛くもなさそうだったのでそのまま寝かせてくれたらしい。

実際起きたらすっきりしていて、不快感はほとんどなくなっていた。
え、もしやこの展開、ただの寝不足と解釈される？と冷や汗をかく。私のどこまでもネガティブな思考とは反対に、彼も駅員さんも良かったねって言ってくれた。あなた達の優しさに涙を覚えたよ。
学校にも連絡してくれたらしい。今日はこのまま家に帰りなさい、とのこと。まあ、そうだよね。

そこで気付く。私、彼に学校サボらせた！？

突然ものすごい勢いで謝り始めた私に、彼はあの綺麗な笑顔で大丈夫だと言った。出席日数は十分だからと。これには私もポカンとしてしまった。出席日数云々より”サボり”っていうのがダメな気がするよ。え、そう思うのは私だけではないよね？
そう答えるあたり、もしや彼は天然さん？おぉ、彼の意外な一面ゲット。って、えー？
…私たちの会話が噛み合ってないとみてとった駅員さんが、ちゃんと彼の学校にも連絡したと伝えてくれた。ありがとうございます。

そして、彼の名前を知った。
彼は”竹田拡紀”というらしい。

彼の名前を知れたことで有頂天になり、私もとっさに”端山純子”と名乗った。
おそらくもう私の名前なんか知ってると思うけど、名乗られたら名乗り返す。重要なコミュニケーションだ。……嘘です。ちょっと恥ずかしいです。名乗ってから気がつきました、はい。
彼は知ってる、と笑いながら返してきた。ですよねー。はは。思わず半笑い。

彼ともっとお話したかったけど、そんな訳にもいかない。駅員さんに丁重にお礼を言って部屋を出た。
彼にも土下座する勢いで謝った。うん、我ながらにすごい迫力だったね、あれは。
彼は私の勢いを受け流し、「家に帰るんだよね？」と聞いてきた。さらっと受け流されたことと、彼から発せられた言葉に、少々面食らう。む、これって彼の天然効果？天然恐ろしい。友人にも天然系いるけど、やっぱり恐ろしい。
……そりゃあ、私はもう平気なつもりだけど、学校には来るなって言われたし。平日の真っ昼間に遊ぶのを楽しめる程、度胸無いし。帰らなきゃ彼も駅員さんも浮かばれないだろう。私は頷く。
すると「送るよ」、と返ってきた。

いやいやいや。

いくら学校に連絡したからといって、竹田君をそんなことに付き合わせたりしたくない。きっと竹田君を必要としている人がいるよ！君は必要な人材だよ！

私は必死に言った。えぇ、上記の言葉を一字一句違わずに言いましたとも！

彼は何だか私を送り届けることを使命のように思っていたようだけど、私だって彼を学校に返すことが使命だと思ってた。

彼は心配そう、むしろ不満足そうな顔をしたけど、結局譲歩してくれた。それでもホームまで付いてきてくれて、そこで彼と私は別れた。

彼は別れ際、「またね」と言った。

その時の衝撃ったらなかった。何秒かその意味を、固まって考えた。その後は、もうさ、車内でニヤニヤが止まらなかったよ。

”またね”

今度が、次が、ある言葉。これっきりではない。”また”。

うん。また、だ。きっと明日も彼に会える。

”おはよう”って言おうと、その時決心した。

5

それから竹田君とは友達になった。

おはようと口に出して言う。当たり前のように返事が帰ってきたときほど、嬉しいことなんてない。

何だかずっと友達だったような感じがして、くすぐったかった。まあ、毎日心の中で言ってたからだろうけど。今思うと、過去の私が可哀想になってきたな……。

毎日、少しずつだけどお話しするようになった。竹田君は私と同じ高校2年生で、やっぱり始発駅乗車で、毎日本を読んでるけど理系で、化学部で。今まで知ることができなかった、情報の数々。沢山あって、全部はとても話きれない。

お互いのことを知った後も、例えば、その日の天気の話なんかで会話はずっと続いた。竹田君と話すのは楽しい。竹田君は博識なんだ。毎日勉強になってる。

実は。すっかり男子と疎遠になった私は、この頃男子に苦手意識を持つようになった。図体でかくて怖いし、何か不機嫌に見えるんだよね、奴ら。何かこう、睨みつけられてる気がするっていうか。……自意識過剰？

でも竹田君は大丈夫。華奢だからかな？これを本人に言ったら、若干気にしているようだった。その姿は何となくかわいかった。

それと、竹田君は私に席を譲ってくれるようになった。

最初は遠慮してたんだけど、いやに必死だったからさ。それを見てるのも楽しかったけど、まあ、説き伏せられた訳です。竹田君と

舌戦したら負けることを悟った日だったね。薄々気付いてたけど。

最初はただの”優等生”だった。そんな彼への認識は、どんどん変わっていった

私たちは示し合わせたように、毎日同じ電車に乗って、話した。それ以外は何もしていない。約束をして他の場所で会うこともない。

そんな関係だけど、お互いにすごく満足していた。何だろう、とても過ごすのが楽な時間。そんな時間が私たちの間には流れていた。

6

竹田君に出会って2度目の春がやってきた。つまり、友達になって最初の春。

今日は、珍しく二人とも席に座れた。…思い出すのも恥ずかしい、あの黒歴史以来のことだ。

昨日あったことなどお互いに話し終えた後、竹田君は再び本を読み出した。決して気まずくない沈黙が流れる。そんな中、竹田君は不意に本から顔をあげた。

「端山さんはもう大学決めた？」

私達は3年生になった。当然、受験に関することは耳にたこ状態。中には2年生のとき、1年生のときから受験校を決めてる子もいたけど、私はまだ何も考えていなかった。

友人に聞かれても、大して考えもせずに無難だと思われる返事を返す。全く実感がなかった。そんな私を友人たちは、自分のことよりも心配する日々。私、どれだけダメな子だと思われてるんだろう。…怖くて聞けないや。

「……まだ、何も決めてないかな。竹田君は？」

竹田君に聞かれた途端、それらは急に現実的なことに思えてきた。他の世界だと思っていたことが、目の前に広がる。普通、そんな体験をしたら焦ると思う。でも竹田君に言われたそのことは、私の中にストンと落ちてきて、違和感はない。焦りも感じない。不思議だ。だから正直に言った。

「目星は付けてるけど、はっきりとは決めてないかな」

ふうん、と返す。竹田君はそんな私を見て、軽く笑んでから本に視線を戻した。

私はあれ？って思った。

何かモヤモヤして、落ち着かない。それから、高校を卒業したらこの関係も無くなることに気がつく。とっさに嫌だって思った。その理由は単純明快だ。大切な友人と会えなくなるんだから。

そう思って、やっぱり変な感じがした。もう、一体これは何なのだろう。随分昔に経験したことがあるような、ないような。記憶の限りでは、最後の経験は小学生だったと思うんだけど、はて、何を経験したっけ。

どうしようもなくなって、何となく竹田君をボーッと見た。本を読んでるんだから、集中してこちらには気がつかないはずだ。随分蓄積された私の中の竹田君情報は、そう告げる。

だけど、その考えは浅ましいものだった。竹田君はそんな私に気がついたらしく、再度本から視線をずらした。私は思ってもみなかったことにどぎまぎする。

竹田君は「ん？」という顔をした。どうしたのと語りかけるような、優しい、あの綺麗な微笑み。

それで、気づいた。

あぁ、私、この人のことが好きなんだ。

納得した。なるほどなるほどと、心の中で何回も頷く。

それこそ先の竹田君の言葉のように、何の抵抗もなく、ストンとあるべき場所にはまった感触がする。

……ふむ、これはどうしたらいいものかね。目の前の御仁はこれを聞いたらどんな反応をしますやら。

私は逸る気持ちを抑えて、不思議そうにしている竹田君に向かって口を開いた。

［完］

6（後書き）

読了ありがとうございました。

後書きは活動報告のほうでさせていただきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1076y/

私の定位置

2011年11月16日10時41分発行